

ひょうご 水百景

No.39 佐用川（佐用町平福）

～佐用豪雨からの復興なった宿場町・平福の川端風景～



写真-1 平福の川端風景（平成26年7月撮影）

■ 郷愁を誘う宿場町・平福の川端風景

上の写真-1は「川端風景」と呼ばれ、佐用川に面した土蔵や川座敷などが川面に映る景観が宿場町・平福（ひらふく）のシンボルになっていて、休日ともなると多くのカメラマンが訪れます。

かつて因幡街道随一の宿場町として栄えた平福は、旧街道沿いに残る古い家並みが往時の面影を伝えています。

天神橋下流の3軒の家の土蔵の壁は、白い漆喰壁がすっかり剥げ落ちて下塗りの土壁だけになっていますが、それがよけいに郷愁を誘っています。壁下の石垣（民有護岸）は、他の家々がすべて練石積に変わっているのに、この3軒だけが空石積のままです。空石積は、写真-3のように、築石の合間に詰め石がしっかりと充填されていて非常に強固で、平成21（2009）年の台風9号による洪水にも耐えています。

「平福郷土館」の前にある「宿場町平福の川端風景」説明板には、「昭和49（1974）年、河川改修工事により川沿い1.2kmにわたる野面石積の石垣に新護岸がかぶせられたため、住民は景観保全運動をおこし、最も美しい南新町の75mが保存された」と記されています。



写真-2 佐用川沿いの練石積の民有護岸



写真-3 土蔵基礎の空石積



写真-4 佐用町立平福郷土館



写真-5 川門両側の石積

■ 平成 21 年 8 月 台風 9 号により被災

平成 21 (2009) 年 8 月 9 日から 10 日にかけて兵庫県播磨北西部から但馬南部を通過した台風 9 号は、記録的な大雨をもたらし、佐用町*1 を含む兵庫県北西部で、洪水氾濫・がけ崩れ・橋脚の流失などに加えて死者 18 名、行方不明者 2 名を出すという大災害が発生しました。

24 時間降雨量は、佐用町で過去最大である 187mm の 1.75 倍に相当する 327mm を記録、千種川水系河川整備基本方針における計画降雨量 265mm (超過確率: 1/100) の 1.23 倍の豪雨が発生したことになります。1 時間降雨量についても過去最大の 1.56 倍の 82mm という猛烈な降雨があり、大幅な記録更新となりました。

この佐用豪雨により、平福も、町を南北に流れる佐用川が氾濫し、旧因幡街道沿いの家屋が浸水するなど大きな被害が発生しました。

写真-6・8 は、写真-7 の「浸水実績図」から引用しています。



写真-6 流木が引っかった宮橋 (平成 21 年 8 月)



写真-7 平福郷土館前の実績浸水深表示板



写真-8 土蔵群の被災状況 (平成 21 年 8 月)



写真-9 土蔵壁に残る洪水痕跡 (平成 26 年 7 月)

佐用川に架かる宮橋に流木が引っかかって(写真-6)洪水を堰き止める形でそこから溢れ、周辺の浸水深は1.1mにも達したとか。近くの「平福郷土館」の前には宮橋付近の実績浸水深を示す表示板が立てられています。(写真-7)

また、本陣跡近くで観光案内のボランティアをされているおじさんの話によると、旧街道沿いでは溢れた水がひざ上まで来たそうです。

天神橋近くの土蔵の壁には今も洪水の痕跡が残っています(写真-9)。

※1 佐用町：佐用町、佐用川、いずれも「さよう」と読むが、佐用駅は「さよ」と読む。元々、町名も「さよ」だったが、昭和30(1955)年3月1日の合併の際、「さよう」に変更された。駅名は「さよ」のまま現在に至っている。なお、「佐用」は、『播磨国風土記』中の讃容郡の「讃容(さよ)の里」に由来している。



図-1 平福周辺の地図

■ 災害からの復旧・復興

災害復旧は、本来であれば“再度災害を防止する”ために、平成21(2009)年の台風9号による洪水と同規模の洪水を安全に流すように改修するものですが、台風9号による降雨は千種川水系で想定している将来の改修規模を上回る規模であり、この降雨による洪水を千種川河口まで安全に流下させるためには、すでに改修済の下流部を再改修する必要が生じ、相当な期間と事業費を要することから現実的ではありません。

今回の改修は、少しでも早く住民の安心・安全を確保するとともに被害を最小限に止めることを優先して、下流部の現況流下能力と同等の年超過確率1/17^{*2}規模で計画が立案されています。



写真-10 被災前(平成21年6月撮影)



写真-11 工事中(平成25年4月撮影)



写真-12 概成(平成26年7月撮影)

平福地区においては、千種川水系災害復旧助成事業・佐用川工区(平福地区)により、左岸を拡幅(17m⇒26m)するとともに河床を約1m掘り下げることによって河積を約2倍にして流下能力の向上を図っています。ただ、前述のとおり平成21(2009)年の台風9号洪水と同規模の洪水では溢水は避けられませんが、床下浸水で収まる計画となっています。

施工に際しては、川端風景との調和を図るため、県と佐用町、地域住民で構成する「佐用川平福地区景観検討会」を立ち上げ、佐用川護岸等の外観・構造の検討が行われ、自然石護岸とすることが決まりました。その中で、改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査において御殿屋敷跡の南限を区画する石垣と堀が発掘されたことから、出土した石垣の石も一部護岸に再利用しています。



写真-13 埋蔵文化財発掘調査状況（御殿屋敷跡）
（『利神城と平福のまちなみ』から引用）



写真-14 出土した石垣を護岸に再利用



写真-15 左側が石垣を再利用した護岸

また、金倉橋上流にあった農業用水を取水するための宗行（むねゆき）井堰の湛水面は、土蔵群を映す川端風景の重要な演出装置ですが、河川の拡幅に伴い設置位置を約 60m 下流に移し、鋼製転倒堰（旧施設はラパーダム）により機能復旧されています。

堰には左岸側にハーフコーン型魚道^{※3}が併設されています。



写真-16 宗行井堰



写真-17 魚道

復興工事は、光都土木事務所・河川復興室精鋭部隊のがんばりで諸課題を乗り越えて平成 26（2014）年の出水期前に概成しました。

※2 1/17：17 年に 1 回の確率で起きる降雨ではなく、1 年のうちに発生する確率が 1/17 の降雨をいう。

※3 ハーフコーン型魚道：東京都産業労働局農林水産部の魚道会議で考案され、平成 9（1997）年度に多摩川の大丸用水堰の魚道改修に初めて採用された新形式の魚道。構造は、魚道水路にハーフコーン（円錐形を半分にした形）を 2 本ずつ交互に並べて設置し、螺旋を描き反転させた流れを形成させる。水のエネルギーを、流れの横断方向に移動させることで吸収し、左右に折れ曲がった渓流に近い流れを実現し、魚自身の運動能力に応じた部分を選択して遡上することができる。

■ 利神城址から望む平福の町



写真-18 利神城天守跡から平福の町を望む

過日、庵川沿いの登山口から汗だくになって利神山頂（標高 373m：平福を通る国道が 373 号なので覚えやすい）まで登りましたが（城跡の石垣や登山道での崩落の危険性があるため登城は自己責任で！）、山頂は地元の方が草刈りをされているようで意外に広くて見晴らしもよく、天守跡から旧因幡街道沿いの平福の町、佐用川に面した川端風景も一望できました。江戸時代の牢屋跡に建つ「平福郷土館」の女性館長さんに聴くと、平福財産区の管理委員の方々が時々登られて草刈りなどをされているとか。

また、利神城址の下を鳥取自動車道（中国横断自動車道姫路鳥取線）の利神山（りかざん）トンネル（L=960m）が通っていて、北の方に目をやると、“姫鳥線”の庵川橋を望むことができます。（中国道の佐用 JCT から鳥取道に入り、しばらくすると利神山トンネルに入りますが、そのトンネルの真上に利神城址が見えます。）

写真-18 に記した茶色の破線は、旧因幡街道です。

■ モノローグ

郷愁を誘う宿場町・平福の川端風景ですが、土蔵や川座敷が建っているのは民有護岸の上。河川管理者にとっては洪水に強い護岸にしたいくても手の出しようがなく何とも悩ましい景観です。民有護岸の足元は、元々大石で根固めして護岸を保護していたようですが、過去の河川改修の際に河川管理者が低水護岸を施工し、民有護岸をより強固に保護するとともに、通路として利用できるようにしたのではないのでしょうか。



写真-19 土蔵群 (平成21年6月撮影)



写真-20 土蔵群 (平成21年6月撮影)

観光案内のボランティアをされているおじさんに、是非にと勧められて佐用町榎田にある「飛龍の滝」(落差≒20m)を見に行ってきました。千種川と佐用川の合流点から、東南東に直線距離で約 2km のところにある滝です。

NHK 大河ドラマ『軍師官兵衛』のタイトルバックに登場する滝ということでそれなりに有名になっていて、現地に着くとアマチュアカメラマンが数名、滝付近でカメラを構えていました。

この滝は三段の滝からなり、下部に落差 4m の小滝が二段あり、上部にやや離れて落差 16m の大滝があります。古くから、雨乞いの場所として知られているとか。

滝周辺の地質は、古生代夜久野岩類の斑レイ岩で、滝の水しぶきがあたる岩場にはイワタバコが群生していました。8月頃に紫色の花を咲かせます。

今回のテーマ「平福の川端風景」は 1 回で完了の予定でしたが、情報を集め過ぎ、それを捨てるには忍びないため、テーマを 3 つにしてまとめようと思います。



写真-21 飛龍の滝

イワタバコ（岩煙草）

イワタバコ科イワタバコ属に分類される多年草。和名は、葉がタバコに似るので名付けられたとされる。日本の本州、四国、九州、沖縄および、台湾などの山地に分布し、湿り気のある岩壁などに群生する。7～8月頃、葉の根元から高さ10cmほどの花茎を伸ばし、散形花序をつけ紅紫色の花が咲く。



写真-22 イワタバコの群生

【参考資料】

- 1 『佐用町史～上巻』 佐用町史編さん委員会編 昭和50年10月
- 2 『CON-TECH ひょうご42号』（財）兵庫県まちづくり技術センター 平成25年6月
- 3 『改訂増補 佐用の史跡と伝説』 佐用郡歴史研究会 昭和48年6月
- 4 『利神城と平福のまちなみ』 佐用町教育委員会教育課編 平成25年3月
- 5 『イワタバコ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成26（2014）年8月 『ひょうご水百景』No.39

改訂：令和8（2026）年4月 『ひょうご水百景』No.39